

【優秀賞】テレビ愛媛賞

「共生社会」の実現にむけて」 今治市立玉川中学校 1年 松木心優

私は、生まれつき聴覚障がいを持っている。だから両耳に人工内耳という機械をつけている。

つい最近、左側の頭部にインプラントを埋め込む手術をした。退院して帰ってきた時、母から私が生まれつき難聴だと聞いた時の思いなどを聞いた。私が難聴だと知った時、一番悲しんでいたのは父でずっと泣いていたことやこの先どのように育てたらいいか、将来がとても心配でたまらなかったと聞いたとき、私は胸が痛くなった。

初めは二歳くらいから病院でリハビリなどをし、普通の保育所に通っていた。途中から聴力が落ちていき、右耳が人工内耳に変わった後、松山にある聾学校に通った。聾学校は私と同じ難聴を持っている子たちが集まっている学校だ。小学一年生まではそこで発声練習や手話、会話練習などをした。多くの人の支えがあり、小学二年生から普通学校に転校した。転校した当初とても緊張し、自分で障がいの事を言えなかった。自分の障がいの事を話すのは苦手だ。いじめられないかな、悪口を言われないかな、友達を作れるかなと不安になるからだ。初めは無視しているとみんなから誤解され、いじめにあった。先生に言ってもうまく伝わらなくて余計いじめがひどくなった。だんだん学校に行きたくないと思うこ

とがふえてきた。

でもクラスの中には私のことを分かろうとしてくれる子や手話を頑張って覚えようとしてくれる子もいた。嬉しかった。その子たちのためにも自分のためにも頑張ってリハビリを続けた。その結果、発声もきれいになり自分から進んで、「私は障がいを持っています。後ろから声を掛ける時はトントンしたり、大きな声で言ってください」と、言えるようになった。次第にいじめが減っていった。中学校に入学し、たくさんの友達ができる。このことから私は自分が持っている障がいはきちんと自分から伝えないといけないということを学んだ。こういうことが言えるのは他の障がいも同じだと思う。

六月の総合の授業で身体に障がいを持っている方とツインバスケットボールをしたり、話を聞いたりした。その方は高校生の時に事故で首から下が動かなくなったそうだ。私のように生まれつき障がいを持っている人もいれば、突然障がいを持つこともあるということを知り、障がいについてインターネットで検索してみた。

すると、しばしば障がい者への差別についてのニュースを目にするようになった。そこで、障がい者に対するいじめを調べてみると、障がい者の中でもいじめられた、あるいは差別されたと感じた人が全体の六割もいることが分かった。障がいの種類によって割合は変わるかと思っていたが、あまり変わらなかった。

平成二十五年六月から、「障害者差別解消法」という法律が作られた。この法律では国の行政機関や地方公共団体、会社や店舗などの民間事業者は、障がい者への不当な差別的取扱いが禁止される。また、障がいのある方や介助者等から、配慮を求める意思表示があった場合は、負担になり過ぎない範囲で合理的配慮を行わなければならないと決まった。しかし、この法律を作っても未だに障がい者に対するいじめや差別はなかなか無くならない。

これらを通して、二つ考えたことがある。

一つ目は、障がい者に対する見方を変えてほしいことだ。先程も言ったように障がい者に対するいじめや差別が今でも多くある。それは障がい者に関して知らないからだと思う。普通の人には障がいを持っていないし、感じる事ができない。そして私たち障がい者も小学生の頃の私のように自分から話すのは難しい。だからこそ知ってもらいたい。少しでもいいから障がい者のことを知り、理解してもらいたいと思う。知ることで障がい者にとって救いになることもあるからだ。

二つ目は、遠慮せず助けてほしい。私の経験だが、障がい者は、困っていて助けてほしくても助けてとなかなか言いづらい。助けてと言ったらうっとうしいとか嫌だと思われるのではないかと不安になるからだ。だから、困っているなど感じたら、「どうしましたか？」と聞いてほしい。そうやって手を差し伸べるこ

とによって社会はより良い社会になっていくと思う。障がいのある、ないに関係なく人は一人では生きていけない。だからこそみんなで助け合い、私が考える「共生社会」になっていくことを願う。